

平成17年度 森吉山麓高原自然再生協議会 第2回技術検討小委員会 議事録

平成18年1月17日 13:00～

秋田地方総合庁舎 4階 第2会議室

出席委員 越前谷委員、福森委員、佐藤委員、蒔田委員（以上4名）

開 会 午後1時00分

課長 (開会)

どうも、今日は皆さんお忙しいところお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。まだ、松の内が明けたばかりということもありますけれども、どうぞよろしく願い申し上げます。今まで何回か御挨拶して参りましたので、今日は特に申し上げることはございません。よろしく願いします。進行の方を先生から。

蒔田委員 足下の悪い中お集まりいただき、どうもありがとうございました。今日は前回の協議会の中で、技術検討小委員会の方でどういうふうな作業が望まれるか、というふうな話になりましたけれども、そういうことを踏まえて、この小委員会でこれからどういう作業を進めていくか、それから、今その後いろいろ資料をやっていただきましたけれども、この資料に基づいて今後の進め方なり、協議会へどういうふうな形での報告をしていくかということを考えて行きたいというふうに思います。進め方としましては、まずこの小委員会からどういう形で報告をしていかなければならないのか、報告をしていけば良いのか、というようなところを一番最初に。細かな話をして、その後再生に向けて、それぞれの方のイメージを語っていただいて、共通の理解をある程度持ったうえで、具体的な作業内容について洗い出すというふうに進めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。それでですが、まず資料の確認をした方が良いんじゃないかと思っております。事務局の方でお願いできますか。

事務局 まず、式次第が1枚、あとこちらの方からお配りした資料として、委員の先生方には事前の配布させていただきましたけど、資料が二つ。今日は配ってありませんけど、申し訳ないですけど、こちらの方においてありますので。参考まで吉川委員から、こんな感じでどうですかというふうなのが、去年の年末にFAXが入ってますので、参考までにそれをつけております。あと去年のエヌエスさんにやってもらった調査の関係する部分の抜粋ですけど、ブナ林等の植栽に関する事例等という資料。それから事前に昨日、途中までというふうなので、あくまで参考にしていただきたいんですけど、前回の協議会でどんな話だっけ、って

言うのが多分出てくると思いますので、完成途中ですけれども、議事録作ってます。昨日送ったのに、最後の方が追加されてます。ただこれ、3カ所にやっておりますので、まだチェックしておりませんので、聞き取れないとことか空欄になっておりますので、中途の段階ですが、御了解願います。それから、B4の裏表のが越前谷委員からの資料。それからブナの育苗、植樹パターン、県内各地のブナの植栽図の成績というこの2枚の、これが森林技術センターからです。それから、採草地におけるボランティア植樹箇所の活着状況について、これは蒔田委員からの資料になります。それから、福森委員の方から、右肩のところに福森と名前の入った、あとそれからA4の本のコピーが2枚。それからA3のコピー、これも福森委員。福森委員のは5枚。これが今お手元に配布されてる資料となります。

蒔田委員 福森委員のこの本のコピーは本の題名とかは。

福森委員 しゃべらないと、説明しなきゃなと思って。「ブナの森を楽しむ」っていう、西口、親に、ちかおさんと言う方の岩波新書の443です。

蒔田委員 このA3の資料はどこの資料なんですか。

福森委員 これは本からじゃないですけど、この内容を会報というか。

蒔田委員 会報なんですか。

福森委員 はい。

蒔田委員 と、いうことで、それではまあこれから議論を進めていって、それを協議会へどういうふうな形で報告していったら良いのか、いうふうなところについてなんですけど、まず事務局の方の考えっていうのを聞かしていただければと思うんですけども、どうでしょう。

事務局 前回の協議会の内容ですけれども、この技術検討小委員会で検討が必要だろうというふうに言われた項目っていうのが、委員からのメモなんですけど、委員の方からブナ植栽事業の内容・経過等についてっていうふうなの。それから植栽植樹方法。それから継ぎ足して2m提示して欲しいそういうふうなことが前回の協議会で技術検討小委員会にふられた内容だと思います。ただ、あのこの事業をやるにあたって、全体構想と実施計画という二つの計画があります。それぞれ切り離せるものではないんですけど、ごっちゃになってるところがあるかと思います。まず、全体構想っていうのが、ここを前回の議事録でも、うちの方の課長が50年後、100年後を目指して、その夢を語ってもらいたい、というふうなことを言ってるんですけど、将来的にあそこをどうしていこうかっていうのが全体構想。

その中で、特に協議会の中で問題になっていたのが、ビジョンとか目標とかって
いうふうな言葉で言われてましたけど、そういうふうな、どうするのかっていう
のが全体構想の中で今ちょっと問題になっている。その全体構想を含めて、より
実質化したのが、実際どこに植えるかっていうふうな実施計画になります。その
二つの内容、どっちかというところとごっちゃにした内容で、この技術委員会
で検討してくれて前回投げられたように感じています。まず、事務局としては、
今年度中に全体構想を完成しなければいけないっていうふうなこともありますので、
実施計画の内容を念頭に置きながら全体構想のビジョンや目標をこういうふうな
内容が良いんでないか、技術的な裏付けについては助言いただいて、出来れば
次の技術検討小委員会としてこういうふうな内容であれば実現可能であるとい
う形で、ある程度御意見をいただいて、こちらの方から案を協議会に提出とい
うふうな形に出来ないかと思っております。それとはやっぱり切り離せないん
ですけど、全体構想のとはもう一つ別に、より具体化した実施計画を、それ
こそ、どこにどういうふうに植える、そういうふうなのをこちらの技術検討
小委員会の中でちょっともんで、いろいろと教えていただけたらと思ってい
ます。こちらの考え方と委員の考え方とうまくかみ合っていないところが
もしかしたらあるかと。教えていただければ。

蒔田委員

現実問題としてなかなかその全体計画と実施計画と切り離してなかなか
難しい、訳だし。それからビジョンが先行するのか、それが実現可能かどう
かっていうのが先行するのか、そのあたりも現時点では並行してやらなき
やいけない、両方見ながらやらなきやいけないんで。協議会全体での
全体計画を作るものとしてこの前はかなりだぶってくるってことは事
実だと思うんですけども。ただやっぱりこの前の小委員会でも議論があ
りましたように、やっぱり技術的なことについて我々は基本的にやる、
というのが本筋だと思います。もちろん皆さん、これまでの経験から、
いろんな夢を持ってる、それを語り合うっていう場所は当然必要で、
ここでも議論しますけれども、あくまでも原案作りをやるわけじゃない、
ってあたりは認識しておいていただきたいと思います。我々の各専門化
として、しゃべった意見と協議会のメンバーの方が一人一人喋られる
意見とは対等である。ということを確認しておいて欲しいって思うん
です。そうしないと協議会の方、地元の方の意見というのが組み入れ
ない印象を与えるのはまずいと思います。そこはちょっと注意してお
いていただきたい、というのが私の意見なんですけど、いかがでしょ
うか。

越前谷委員

このまず一つは協議会のメンバーが基本的に本当にこれを理解している
かどうか。僕にはなかなか見えないところがあるんですよね。正直言
って私自身も再生事業ってのがなんなのか。やっぱりこれ再生法見た
ってね、ああなるほどなるほどとは思いますが、具体的にぴたっと胸
に納まるようなものが少ないです。根本的になんかストーンと落ち
ないんです。おそらく協議会に来る委員それぞれの思いが、その思
いが実際によって立つところが違ってる。でそこ

ろいろ議論して、一つのものにまとめ上げていくというのが、この協議会の非常に大きな役割なんですけども、非常に難しい話なのね。そのプロセスを、実は再生事業だって言えばそれまでの話なんですけど。で、それをまあどうやって分からせながら、それを引っ張ってるのが一体誰なのか、それがわからないです。行政がやっぱりあんまりやりすぎて、今蒔田委員が言ったようにやっぱりこれは本来、地方の、地域の人がたが本来やるのが、一番望ましい訳なんですけどもなかなか、あれでしょう。やっぱり行政がやってやると自分の問題とは思わないし、結局それが長続きしないわけですよ。で、どうして参加を促すのか、非常に難しい問題なんです、本当は。私もさんざんとそういう経験しているからわかるんですけど、なかなかねうまくいかないんですよ。県内の情勢から。これ東京都みたいなところでやると比較的まとまる可能性があるんですけどね、そうでないでしょ。要するにまだ農山村街、田舎っていえば田舎だ。まったく都市化されてないですからね。やっぱりなかなか難しいと思いますね。それともう一つはね、根本的な話なんですけど、これまあ蒔田委員とちょっと私メールでやりとりしたんですけど、作業部会っていうのがないんですよ、基本的にね。で、委員会って名前が付くのは普通は叩き台を出していただいて、それに対して少なくともそれに対して議論すると、あるいは参考になるような、そういうふうな小委員会が委員会とぶつかる訳なんですけどね。それじゃ、誰が叩き台を作るのか。それはまあ、実施計画だとか、あるいは全体構想だとかあるんだと言いながらもね、でそれは全部自然保護課でお作りになるんですか、自然保護課で全部作れるのか、という問題もある訳なんです。やっぱりね、誰かが作らないといけないのかなという問題もあるんですよ。で、ところがですね、作業部会という位置付けされてない。それぞれ、職場も持ったりなんだりしてるからね、自分の時間を割かなきゃいけないでしょ、一週間だけ時間を割いて一生懸命やるっていてもやっぱり。あなた方で一生懸命頑張るのは良くわかるけど、あなたもプロではないですよ。やりきれないことかなり出てくる、その辺が、やっぱりね、協議会もだしこども、持って行きかたが非常に難しいと思うんですよ。で、そこをね、やっぱりもう少しはっきりしてね、協力してもらおうとか、ここの部分だけはなんとかお願いするとかしていかないと、これ絶対何回やっても動かないですよ、恐らく。これをまたやって、また今度協議会やる訳でしょ。協議会また下手すると前の話に戻ったりして、何故かわからないけど、でまた小委員会もまた問題が押しつけられるんですよ、で小委員会もごちゃごちゃして、要するに小委員会とか協議会がそういう行政的なもの、スケジュール的なものもらってるけど、決してその地域の人ものにはならないで、終わってしまう訳ですよ。で、今度はいよいよ実施計画たてて事業化してとにかく出てきたと、結局それだけで終わってしまう訳ですよ。それであつたらこれはもう植林事業そのものだよ、で、もう再生事業でもなんでもないっていう話になっちゃう。やっぱりね、実体として動かすコアをきちっとしながら、位置付けながら、そしてやっぱり多少迷惑かからないふうに、ちょこちょこっと分担をしてやらないとね、これ動かない。私はそう感じるな、今までの協議会の動き見てて。一生懸命自然保護課が難儀してるのわかるけれどもね、

協議会の場も時には感情論になっちゃうでしょう。感情論になってしまえばね、私は止めたくはないけど、なかなか止めがたいでしょ。これきっと。間違いやってる訳じゃないっていうのはわかるんですよ。やっぱここはね、もう今回小委員会が後2回あるんですよ、今回の結果でスケジュールが後4回目の協議会でしょ。本当は2回目、今がね、ほぼ形が出来てなきやいけないんですよ。ある程度。それを協議会4回目にかけてですよ、でまた多少いろいろな意見がでるかもしれない、でまたそれを受けて、最終的にあれでしょ、まとめたのが報告になるのかどうかわからないけど、それが3回目の小委員会なんですよ。それで5回目の協議会っていうのはそれを基にしてね、後は大筋は良いと、みんなこれでOKですよと、大筋ではね。細かいことは事務局に預けてても良いですよ、というところでしゃあないですよ。そうするとね、このスケジュール見るとあまりに厳しい訳ですよ、今の現状から見ると。これどっかで打開していかないとね、まとまったものもまとまらない訳ですよ、これ。だから私はね、やっぱりその、確かにいろいろな再生法だとかいろいろものを協議会のメンバーやる、やってるのはわかるんですけども、今まで金かけてきていろいろ調査している訳ですよ、調査の報告があつてね、あまり難しくやらないでね、やっぱりあの人がたが欲するような情報を与えなきやいけない訳ですよ。誤解のないように。だから土壌が悪かったとかね、ああいうところは非常にその専門的すぎるというかね、ああいう雪がいっぱい降るとか、こういうのはわかってはいるけれども、そういうのは克服していかなくちゃいけない訳なんですよ、何らかの形で。そういったものは共通して、みんながね、認識しなきやいけない訳なんですよ。で、その上でやっていこうということですから。やっぱりそういうものが形成されていかないとね、なかなか木を植えていくとか、森を再生していく、という力の源が出ないと思うんだよね。まあ私ばかりしゃべっても。どう考えていきます

今野課長

ちょっと良いですか。今までの話で叩き台を誰が作るかっていう話の一つありました。これやはり事務局が考えなきゃならないと思うんですよ。だから、それ事務局でやります、それ叩き台はまず。それとスケジュールなんですよ、今おっしゃったように今日終わって、今、考えてるのは、今日まず皆さんの御意見、いろいろフリーで出していただいて、それを参考にして叩き台を作ってですね、で、次の協議会の前までに先生方とやりとりしながら、事務局の案を次の第4回目の協議会にかけると、でその第4回目の協議会で、いろいろ御意見を伺った後で、また小委員会を開いて、最終、第5回の協議会で承認してもらおうと。一応そんな段取りを考えております。これは前回の協議会でも申し上げましたけども、本来今年度内に実施計画も作ろうということでしたけども、それはもう絶対的に無理だと、それで実施計画については来年度早々、集中的に作業を進めて、来年度の前半に繋ぎたいと、そんなスケジュールでいきたいな、と考えております。それから、あの誰がリードするのかっていうのは、事業を誰がリードしていくのかっていう話だろうと思うんですけど、私はやはり実施計画の5年間については、県がやっぱり積極的に関わって、県がリードしていくと、そして、その次のステ

ップはこれはそれこそNPOだとか、あるいはその地元の人達を中心となった何らかの組織を作ってもらって、そこが中心になってやっていただくことになろうかな、というような感じを持っております。これはもう全く私個人の意見なんですけども、例えば今八森町で工藤さんですか、その方たちがそのグループで、やはりブナの再生事業ということでやっておられる例もあることですし、県内でもそういう例がない訳ではないと思いますんで、まあ、実施計画の5年間は県がリードして、その次はあとは地元の人を中心にやってもらうのが良いのではないかな、いうふうに思っております。

佐藤委員

今、課長さんが言われた中で、最終的に誰が叩き台を出すかっていうことで最終的に事務局がっていうお話なされましたけども、事務局として今一番悩んでいることは叩き台を作るにあたっての、表現というか、そこが一番大事だと思います。蒔田委員のメールにもありましたけども、やはり、あの今日はこの委員の、委員も協議会のメンバーでありますし、今まで2回出てますので、あの会全体の雰囲気とか協議会の構成員とか、やっぱりこの中で、とりあえずこの中で、皆さんでイメージを、共通な認識で、それを固めることによって、事務局もそういうのを聞いて書けるようになるのではないかな、というふうな気がします。

作業部会とかそういったものがないんで、立ち入った話になるんですが、結果論になることであれば、とりあえずその再生のイメージをまず、とりあえず協議会でこういうものだ、ということをお話してから先に進むのではないかな、と事務局の方としてはそこら辺どうですか。話を渡してもらえば、こちらもしやすいところがあるんで。

事務局

そうですね、全体構想の中でこっちの方で2回目の時に叩き台提出しました。山のその土地どういうふうなところなのか、とかそういうふうなところはどうでも良いのかもしれませんが、あの一番重要なのは、やっぱりその今言われたビジョンとか目標とか、そこをどういうふうにするのかっていうふうなところが一番基本だと思います。で、それをやるにあたって、例えばこう、目標の中で、5年後、10年後の目標は。それから50年後の目標、100年後の目標、そういうふうな提示して欲しいっていうふうな話がありましたけれども、その現状を見たうえで、全部5年後、10年後にどういうふうになるのであろう。50年後には大体どこまでやれるのかな。そういうふうなところはやっぱり専門的な委員の皆さんから意見をもらわないと、こちらだけではやっぱりそういうふうなところ作れないんで、そういうふうな50年後であれば、大体こう木がどれぐらいまで育つだろう、で、周り一面が全部森林に、50年で森林にとかっていう話もありますけど、本当に50年でそういうのが可能なかどうか、そういうふうな専門的な見地から、こういうふうなことは可能なんでないかっていうふうなのを知恵をつけてもらうっていうか、そういうふうなのを御意見いただければというふうに思っております。

蒔田委員

あれなんですね、全面植えちゃえば全面に開始するわけですよ。それは苗がどれだけ確保できるかとか、種がどれだけ確保できるかっていう問題はあるんですけども。ただ、そういう問題でこの小委員会があるわけじゃないんですよ。だから、僕は何度もここへ振ってもらったら困るといのは、それはあの場所をどうして行きたいってところがまずないと、全部森林で埋めるのが望ましいのか、それとも草原景観を維持するのがある程度あって、森林があって、その周辺が森林と繋がって、っていうのが望ましいのか。それはあの、技術的なものの前に協議会の方で議論されるべきじゃないかと、そこまで私は背負えない。それはやっぱりこの会のメンバーで議論して、これだったら出来ますよ、っていうのは言えると思うんですよ。苗がこれだけ集まるんだったらこれだけの森林出来ますよとか、どれだけの労力を入れればどれだけの森林の再生をやっていけますとか、というの言えると思いますけど、それで良いのかどうかっていうのはまた別の問題で。そこのところは協議会で合意を得るような段取りを作ってもらわないといけないのではよ。ですから、それは土壌の話をしてもらって、そしてそれから地元の人とかとももっと話をしてもらって、合意を、こういう方法で大体いけますよっていう合意を作ってもらっていかないと、協議会の場でいきなり議論しても、どんなに話してもまとまらないと思います。だから、僕はここで全部決めて、原案作りするのではないですよ、っていうのはそういうことなんです。

越前谷委員

私も賛成ですよ。この委員会の性格でそこまで背負わせるという意味合いで私は受け取らなかった。ですから、やっぱりここで出来ることと、やっぱり本来協議会がやること、やっぱりこれ明解に分けてですね、やっぱり、あの、本当はですね、今回いろいろな調査したわけですよ、土壌であった、まあお金をかけて調査した訳なんですよ。その分析の結果ですね、どういう課題が浮かび上がっているかまだ明解じゃなかったんですよ。そこがはっきりしないものだから全般的にぐらついていると思うんですね、私はやっぱりね、課題をきちっと整理して、再整理今からでも遅くないですから、再整理してそれで協議会でね、これは基本的に出していただかなきゃいけないことは、これは出してもらうと、いうことをね是非やってもらいたいと思うんですよ。でないと、みんなで共有されるっていうのは絶対にあり得ないですからね。遠回りになるけど、絶対得になると思うんですよ、私はね。んで、今先生がおっしゃったように多分あれかもしれないですよ、自然保護課の方でね、地元の人方ともうちょっと出かけて行ってね、話し合い持っても良いんですよ、集まって、何人地元の人いるかわからないですけども、でなんかそういうふうにならなくても出かけて行くとかっていうのをやってね、向こうの人が、地元の人意識が、まとまらないっていうのは仕方がないかもしれないけど、ある程度あの人参加している意欲をね、高めていかないと、その人方の考えを大幅に取り入れていかないとね、根付かないんだ、これ。

蒔田委員

逆に言うと地元の人達にもっと仕事を担ってもらわないとやる気にはなれないですよ、と僕は思いますよ。例えば森吉でもいろんな、再生事業以外にいろんな

ことやおられるじゃないですか、イベント的なものだとか、こんなことを森吉でこんなことやってますよってというようなことを協議会に報告してもらいたいなのでも良いだろうし。だから、もっとそういう意味で、地元の人との意志疎通を図らないと、ちょっと、ん、という気がします。

越前谷委員　　もっと市町村をもう少し何らかの形で入れ込めないのかな。なんかいろいろ抱き込めないのかな。

蒔田委員　　というのは、この技術検討小委員会の議題から遠ざかっていくような気がするんですが。

越前谷委員　　いや、そうするとね、いつだったか協議会の方でね、いろいろほら、実際見たいって人いるって言ったじゃないですか。で、やっぱり地元が主体的になって見たいってのであれば、そういう企画をしていただいてね、それにまあ、協議会のメンバーも参加したいのであれば、秋田でもどこでも良いから参加してみるとかっていう、やっぱり秋田にもね、なんか実働部隊みたいな人を置かないとね、足がないのかもしれないな。

佐藤委員　　今の部分はそれこそあれですよ、役割分担の中で当然加味していく話であって、もう先ほど5年間は当然地元だと、そこを抜きにしてこの事業は語れない、そこにかかってくると思うんですよ。

越前谷委員　　いや、俺ね、批判的に言うけどさ、これ今からある程度理詰めしていかないとね、5年なれば金の切れ目が縁の切れ目ですよ、これは。

佐藤委員　　地元の方々っていうのは、委員の中に入っているってことなんで、だからあの人たちが代表で、あの人たちがやる気になっていただいて、あの人たちが自らやる。そういうふうな繋がりを持つてることですから。それは、まあいろいろまあ委員の方なりの意見がありますので、そういったことも言いながらやっていけるのが、合意形成に繋がるのかな、と思ってる。

蒔田委員　　実は今朝、協議会の会長の小林先生とこういう話を実はしてまして、一度自然保護課の課長とも協議会長とも、こういう形で今後の進め方をいっぺん相談する機会を持たしてもらおうと良いなっていうのを、話をしてきたんですけども、ちょっとこの、じゃあ今のテーマについては協議会の会長と自然保護課の方との話につないでいただいて、進めていただいくということで、本題の方に少し戻りたいと思うんですけども。よろしいでしょうか。

福森委員　　っていうか、地元の人なんだけれども、あの、場所が、住んでる場所から見えない場所なんですよ。で、地元という認識は無いと思うんですよ。北秋田市の

人。なので、地元の禿げ山を再生するっていう認識は全然無いと思います。だから、地元の人集まってくださいって言った時に、そのNPOの人とかが、来るかもしれないけれども、彼らも地元の人という感覚じゃないかもしれない。ただ禿げてて、クマゲラがいなくなったとか、ブナの森じゃなくなったから、ただそれを直したいという意識だけであって、だから、その地域住民の、僕もちょこっとここに書いたけれども、地域住民の人が来て、っていうのは本当に誰かが音頭取って、みんな来てください、地元の山だからっていうような言い方で、地元の山だから来なさいじゃ来ないと思うんですよ。なんかこうコミュニケーションの場にするとか、その北秋田市だけじゃなくて、秋田県の禿げ山だから秋田の人来てくださいでも、そういう集め方っていうか秋田県が地元なんですよと。そういう大きい括りでしないとちょっと、地元の人っていう地元、北秋田市のあそこに住んでるそういうことをやっている人だけに押しつけても、5年後は多分ブナに誰も手をかけなくなってしまうんじゃないかな、というのは今聞いてた感覚です。

事務局 釧路なんかでも地元っていう意識が無い。

福森委員 無いです。森吉の人も無いと思います。

事務局 あそこも見てて、やっぱり北秋田市の中心からかなりずれてて、アクセスがかなり悪い。そういうふうな問題があるだろうな、で結局実際いろいろな作業をやるに当たって北秋田市の人だけに、っていうのも結局人口とか考えれば、まあそれは無理だろう。で、やっぱり全県から、全県で今木を植えたい人が集まってくださるような形のそういうふうなのをやれないかな、と考えてはいるんですけども、すいません、そこまで仕掛けられてないのが現状です。

蒔田委員 ああ、こういう再生事業の計画作りするとき、具体的に木をどれだけどう植えるかっていうことと同時にどういう体制で作っていくか、っていうのも一つ重要な柱ですよ。そういう意味での検討というのはかなり真剣にやらないといけないというのは間違いない。これは大きな課題として進めていかなければいけないっていう確認して、次へ進んで行きたいと思いますけど。先ほどもちょっと話の中で私、全体の木を植えるとしたら、沢山植えればそれで出来ると言いましたけれども、例えば、どれだけあの木々全部植えるんだったら、苗がこれだけ要りますよ。で、そのためにどれだけ集めて、山取苗でやるんだったらこれだけ要りますよ、とそういうふうなのを提示するのが、この委員会の役割かもしれない。

だから、そういうふうな意味での情報提供っていうのはこの委員会の役割とされているかもしれない。ちょっと喋った後で気づきましたので追加してください。えっとそれじゃ、まあ、混沌としましたとりあえず次に進んで、再生のイメージっていうのを、ところに進みたいと思いますけれども。どうでしょう。

越前谷委員 私、実はこれに随したような仕事を再生事業っていう訳じゃないんですけど

も、対象は違いますけれども、さっきの皆さんの団体とかいろいろな人が関わる、そしてそれを共通の認識の基に一つのシステムを作り、そして動かそうと、それがハッピーなんだということいろいろ努力したんですけれども、5～6年やっただんですけど、実は正直言って非常に難儀したんですよ。で、やっぱりね、地域の人方が主体を持ってやるっていうのが、いかに難しかったっていうのが、これがね、特に行政から発想した場合が特にそうなんです。上から下に下ろしていくっていう発想が強いもんですから、どうしてもね根付かないんですよ。で、やっぱり今の再生事業を見るとね、考えは良いんですよ。その辺がね、戻す訳じゃないんですけど、その辺が大変心配なんですよ。だから下手すると5年で、金の切れ目が縁の切れ目になるかもしれないし、なんてことを言っちゃったんですけど、そういう危険性を非常にはらんでいるっていうことですね。同じあれでも非常に目的がね、なんとなしにわかる訳ですよ、クマゲラの森作りとこういうふうなことで皆さん協議会で一致したんですけど。そしたら他を見るともっと危機的な状況のところがある訳なんですよ。釧路湿原みたいにね、あるいは霞ヶ浦でやっているいろんなプロジェクトありますよね。で、身近に感じてね、もっとその危機的な状況を見ている人が多くいるというところでもあります。それなりに動くんですよ、でも山が見えないとかっていうようなことになってね、そうするとね、やっぱりね、たまたま何百町歩か昔の放牧場の跡があるっていう程度の話なんですよ。で、隣にはクマゲラが住む森があったから、クマゲラとそういうことにした。北秋田市の市民が見守るか、それから全県の人が動いてそれじゃ、クマゲラが来るための森作りするか。なんかそこにね、非常に弱さを僕は感じるんですよ。で、今までは全く私ね、クマゲラの森作りじゃないとね、これ場面として効かないなと思って言って来たんですけど、実はね、今まで話いうと面倒くさくてこんがらかるから言わなかったんですけど、まあ、地形的にいうとあれは水源かん養の典型的な地形なんですよ、あそこは。こういう盆地ではないですけども、そうだと思います。で、やっぱりね、あれが森林化する事によって、天然のダムの役割を果たす。本体は今のダムですけど。この水の問題があんまり長期な話なもんですから、これもなかなかピンとこないと思うんですけどもね、本当はねクマゲラの森を作ると同時に本当は水の森を作るっていうことなんですよ、あそこはね。で、その地形としてはまさに昔の水源かん養機能としての高い森林はどういう条件ですか、っていうのはそれがピタッと一致するような場所なんですよ。これ、今、学問的にそういうのちょっとわからないですけど。そうすると少しはあれかな、と思うんです。で、まずその、ちょっと簡単に説明しますが、先程言ったようにやっぱりその、再生事業が良く理解されていないっていうのが、何回か協議会見てわかったのは、公共事業の植林事業という意識がなかなかとれない。だから県が予算どの程度あってどうなのか、何町歩やっていけますかとか、事業計画よりの話ばかりが先行しがちなんですよ、これやっぱり、まずいと。で、まあ、行政がやるのは設計をしてね、積算をして、そして予算をたてて、それで予算を執行していくという流れの中で発生していく訳なんですけど、これは全く違って、そういうものではない、ということがどの程度御理解していただ

たのかな、というのが気になります。で、やっぱりこれで一番大切なのは、学術的って言うて訳ですからやっぱり、自然はまだ良くわからないということがいっぱいあることが前提です。やっぱりこれは最低の目標を設定する、最低の手法を僕は仮説だと思うんですよ。そう考えないとね、恐らくこの事業出来ない。で、技術検討委員会が技術の側面だと言ってもね、恐らく技術屋誰一人とってもね、パーフェクトにこれは絶対ですよと出来る誰もいないんじゃないかと思いますよ。確率的に言えば、まあ60点の点数を出すのが答えだよ、という精度じゃないかと思うんですよ。ですから、やっぱり仮説を立てて、それに基づいて実行していく、実験ですよある意味で。これから先はそれで良いじゃないですか。で、いろいろなやり方があるとすれば、いろいろなやり方やれば良いんですよ。その中でいい方法を、こういう方法がやっぱり良かったんだ、といたら今度それを送っていくという、そういうやり方じゃないと。そのためには当然モニタリングが必要で要するにクランプシティの世界だと、そういうプロセスを通じて、自然を再生していく。で、大切なことは本当は再生法にも書いてあると思うんですけど、地域の絆も大切だと、ということなんです。恐らく社会のシステムと自然のシステムを二つうまくドッキングさせながら再生していく、これが一番再生事業で求められることじゃないかと、僕は思うんですけどね。で、そういうことが一つで、それからもう一つ、やっぱり大前提が一つ、自然保護課でもレッドリスト、レッドデータブック出してるんですけども、生物の1/4が絶滅危惧種だということ。まあ、やたらと多いわけですよ。で、まあ我々子供の頃から見れば、いろんな種が、身近にあった種が今はほとんどないでしょ。っていうのはもう、いっぱいあるわけですよ。でやっぱり、そういうものがこれほど減ったっていうのは大変なことだ、ということがやっぱり今の生物多様性の問題であって、これが必ずこの中に入ってなきゃいけないということですよ、考えの中に基本として。まあ、これは再生法繰り返すわけじゃないですけども。二つはやっぱり先になった、これまでの調査の成果、金かけてかなり調査しているわけですから、収集した情報もかなりあります。これもやっぱり現状分析をもっとわかりやすく出来ないのかな、という結果を協議会のメンバーに事前にみんな資料として出したらいかがですかね。で、その中で課題というものをやっぱりきちんと捉えるということが必要だと思うんですよ。で、その課題を共有するとみんな。これがやっぱりこの課題だなど、これがないと進まないと思います。で、やっぱりこれは例えば細かい話ですけども、細かい話ですけども、雪の問題あるいは土壌の問題とかいろいろあると思うんですよ。で、その中にようやと初めて課題がきちっと捉えられて、それじゃ、高原の場所で、再生の目的・目標をどうしたら良いのかと、これがどの程度の森林、例えば林齢的、例えば森林化、まあ蒔田先生が言うて本当は全部やるのか、やらないのか。やるとしても本当にやれるのか、やれないのか、こういうの技術の判断ですよ、ある程度ね。これだからやっぱり必要だと思う訳なんです。それから、どういうところに再生を伝えていったら良いのか。これ、クマゲラの関係で見ていくのか、水の関係で見ていくのかとか、あるいは植栽して成功するところをやってくるのか、いろいろ考え方があ

ですよ。この辺をどういうふうにして纏めていったら良いのか。それから、あの、県の再生事業はどのようにしていくのかと、まあこれはいろいろ、今はどのようにして、その後の繋がりをどうやってこの目標を達成していけるのか、っていうのがその後、恐らく5年でいくらか、そんなにやれるわけないし、その後も続いていくような母体をね、この5年間あるいは出来るだけ速やかにね、そういうものを少しずつ、そういうグループを作っていく、という方法に行かないと切り替えが出来なくなりますよね。5年終わったらバタッと倒れるということになりますから、これも必要だろうと思うんですよ。それから、やっぱりその多様な主体、いろんな人方が参画する、そういう仕組みっていうものをね、これやっぱり一生懸命考えてやっぱり、知恵を出さなきゃいけないんじゃないかな。こういうのが非常に大切だと思うんですよ。で、これもそういう仕組みは、いろんな再生のプロジェクトやっているとどうやって動かしているのか、人とか組織とかそういうもの。その辺も本当は探っていただければと思いますよ。と、いうことで3つ目ですけれども、これがまあ、これは実にアバウトなんですけれども、やっぱこの協議会っていうのを誰もわからない、同じようなことを小笠原先生も言うんですけども、再生のイメージっていうのは、ある程度これね、協議会の皆さんが出していかないとね、これ目的が出てこないんですよ。目標の設定出来なくなるんですよ。で、思い切って叩き台っていうことで、まず図を書いてみたんですけどね、これ書くことによってね、いろんなアイデアが出てくると思うんですよ。で、もちろんこのとおりにいくなんて私も決して思ってませんし、これで良いとも思わないんですけども、ただ、例としてあげれば日本地図でも何でも良いから、出してね、それによってやっぱり色を付けた方がわかりやすいんじゃないかなと思うんですけどね。で、これを思い切ってバァーってやって、まあ現在があって、ブナの天然林があって、2次林があって、牧草地がある。こういう。30年後は天然下種更新でいくらか、人工植採でいくらか、まあ順調に育てば、7m~8mの林間が落ちる可能性がある訳ですけども、果たしてそういくかどうかわからないし。と、いうことで、50年、100年、で、100年になってようやく連続性がね、いくのか、あるいはこれもっと連続性がもっと早く持ってくるのかわからないですけども。で、私のこう大きく見るとね、もしクマゲラが安心して住める森なんてのは、最低でも200年、下手すると300年かかる。まあ、そのころどうなってるかわからないですけど。というような、こういうやっぱり時系列的なものをね、やっぱなんか思い切って出してきた方が叩き台として良いのではないかなと思うんですよ。で、これはあの、例えばシュミレーションという言い方もあるんですけどね、これやっぱりね、言うことは良いけれども非常に難しいですね、現実的に。広葉樹の、広葉樹林のこの再生シュミレーションなんていうのはね、とてもじゃないが難しいと思いますよ。これは恐らくそれだけでまた相当な金かかることになっちゃうと思いますから。それから二つ目はやっぱり再生の手法に関してのイメージですけど、ブナの天然林でこうやって、そばは天然下種の採れるエリアですから、これは植える必要は無いわけですね。あと2次林があって、僕はやっぱりね、この島を作れっていうのはずいぶん前から言ってるわ

けですけれども、島を作りなさい。で、まあ昔森下せいごですか、あの人が良く分散の話をして、要するに主になるところに1本の母樹を配置して、それからまあ下種更新していく。まあ、今誰もそんなこと使ってない、さっぱりわからないですけれども。で、やっぱり島を作るっていうのは、いろんなまあ、植物が新しく侵入してくるというもう一つの大きな意味があると思うんですよ。で、ここはこれをベースにして、後は多様性は少し鳥にとか獣に、まあある程度多様性を負荷してしていても良いじゃないか。まず、基本的にはブナ。ところがですよ、ここでもいっぱい問題あるわけですよ。やっぱり森林化率高めるっていうのは、ブナを基本とするのは、これはまあクマゲラっていうことになると当然そうですけれども、やっぱりこの適地適存が原則だと思うんですよ。ですから当然ブナの話しても湿気ったところはヤチダモ植える必要があるんですね、やらなきゃいけないし。あるいはね、本当に全く植わらないようなところ、どうしても木を付ける必要があると判断するか、しないか、そこもあるんですよ。さっきも言いましたけど。で、どうしてもって言うのは、例えば前にもチラッと言いましたけれどもこれはもう治山という手法しかなくなりますよ。一時的に森林化をはかって、それからブナ林の極相に導くという非常に長期的なプロジェクトになる、それまでしてやるのか、やらないのか、という判断が必要になりますよね。というような問題、それからこの連続性をそれじゃ具体的に島を作った場合、具体的にどう確保していけるのか。これもまた島にも問題がある。上にも出していくのか、いろいろな考えがある。で、やっぱりこの、こういうものをやっぱりなんかね、協議会とかなんかでもこういうところに出して、それを叩き台にして、いやこうだから、ああでないという議論をもんで、ようやくみなさんのイメージするところに固まってくる。で、それに対してそれを作るためにどうしていけるのか、それは技術的な話になってくる、そういう順序じゃないかと、僕なんかは思うんですよ。そうしないとね、やっぱりこの何回協議会開いても、行ったり戻ったりで進まない。で、必ずそこで課題が出たら、課題に対してパーフェクトでなくても必ずある程度の答的なものを出して、一つ一つ片づけていかないと、協議会の最終的な成果としての全体構想は僕は定まらないと思います。ですから、実施計画との繋がりであれば、ある程度実施計画が出来るレベル程度の構想を持っておかないとね、こんど実施計画を作ったときに構想を直さなきゃいけない、なんて話になるかもしれない。で、そうなった構想はもう決まっていますよ、動かしがたいものになっている。それにこの無理矢理当て嵌めたものにしなきゃいけない、変な話になっちゃうから。やっぱりこれはね、詳細までもちろんいらんですよ。全体構想作るときに必要な最小限の具体的なものをやっぱりある程度ね、意識していかないと。長い話になりました。

蒔田委員

どうもありがとうございました。今の話、とりあえず質問があったらと思えますけれども。なければ順番に喋って最終的に通して議論をするというふうな形で。

福森委員

この島を作っているというのは様々な樹種を植え込んで、だんだん人工林を大き

くしていくっていう趣旨ですか。

越前谷委員 どのぐらいの大きさにするのはあれですけど。まあ、例えば50m四方ぐらいのものに、どのぐらいの間隔になるのかはわからないけども人工林の島を作っちゃうと、そういう意味です。

福森委員 牧草地の中にポツンポツンと。

越前谷委員 そう、何反部かわからないけど、それはちょっと具体的に、まあそりゃ設計側の話になっちゃうんですけどね。どの程度のサイズが良いとか、もしこれでいくとすればね。

蒔田委員 で、やっぱりイメージとしては島の大きさっていうのはどんなものかを言ってるんですか。

越前谷委員 ちょっとね、実際はね、例えば一番植栽に適したっていうけど、面積わからなくてね。で、そういうこととか、全体の図面ね、どの程度それじゃ、穴があるかというのは図面を見ればわかるわけなんですけど。え〜、それと土壌の関係で実際に、当て嵌めていくとどういう形になるのかやってみないとね、これ以前果たしてどうなるかっていうのはある訳なんですよ。

蒔田委員 具体的な実施の地図と成果の評価が必要だと。

越前谷委員 それやらないと駄目で、ところがそれやると時間が必要で、やってないんです。で、そのうえでもう一回これやると、もうちょっとわかるんじゃないかと思えます。ただ直感的にですね、やっぱりある程度の森っていう、島の森が必要だ、ということになりますから、少なくともやっぱりね、1辺がやっぱり、いくら少なくともやっぱり1反ぐらいは。本当はこの広さからいけば1ha規模ぐらいは欲しいんですけどね。

佐藤委員 私もまあ、イメージ、島っていうのは。私の場合は島と島を全体で纏める方法はないかなってそういうイメージでずっと考えてる。描いてる。あとはまあ今まで、昨年度までの報告書ありますし、植栽に適した箇所ははっきりしますよね。そこに、地図の上に二次林の位置を戻してみると具体的な島の場所とか出てくる。

越前谷委員 そう思ってるんです。そうするとね、もっと突っ込んだものとしてこれね、見直すことが出来るわけですよ。そうするとそれは良いと思うんですよ。で、僕は連続性も基本的に同じだと思うんですけども、僕はこのやっぱりこの上にも出そうとするわけですよ。島で。だから、これをね、実際に、もうちょっともらった図面が小さくてね、真ん中で虫眼鏡で見るような作業がとても難儀で、や

めっちゃったんです。もうちょっと大きい図面であれば、その辺検討できると思うんですよ。そんなに時間かからない程度で。

蒔田委員 そのあたりの作業については、お願いするという形で。

佐藤委員 エヌエスさんに委託というけども、そういった作業までは委託してないんですよ。

事務局 委託はしていません。

佐藤委員 いや、例えばですね、去年のデータはですね、科学的っていうか、そういうもんだっていうことがわかってますから、調査した場所をきちっと図面に落とす作業がまず必要なんですね。そこをどう膨らましていくか。もし、その植えたとすれば、ここはどうしても必要だという部分が出てくるかもしれない。島で覆わなければいけない。そういうのを一つ一つ説明出来るっていう、作業をしないと。

蒔田委員 そのためには、それで例えば一番植えやすいところから、まあ、ちょっとしんどいけどまあなんとかなるやろうということも含めて、何段階かに設定して、それぞれの場所が何 ha ずつと。で、そのためには苗が何本必要で、それ可能かどうかというふうに進めていくと具体化していくじゃないですか。

越前谷委員 私もそう思うんだよな。

蒔田委員 そのためにはこれまでのデータを基にして、ここに図面があつて、ここはこうもうちょっと頑張って何本とか。そういう作業はここでやれる作業だと思うんですけども、そういうふうにして具体化していくと、もうちょっとみんなが勝手なことをいうという雰囲気ではなくって、煮詰まっていくなじゃないかなという気がするんですけどもね。

越前谷委員 協議会も相当意見が出てくると思うんです。

蒔田委員 その前にもう一つしておくことは、牧場としてここはやっていけないとか出来るとか、それははっきりしてもらわないといけないし。いつもそのあたりはなんとなくわからない、中途半端なまま進んでるんで。あの～、やりにくいんだったら、最初はとにかく出来ませんで良いと思うんですね。ここは当面は何年かは除外しますというんだったら、そういうエリアもはっきり示してもらおうと。その上で議論すれば良いと思うんで。

佐藤委員 やはり、今まで言葉の世界で大体みんな似たような考え方だと思うんですけど、やっぱりきちっとものを作業的に仕上げていかないと、また再生法なり科学的な

云々っていう、それに繋がっていかない。もうデータは沢山取ってるわけですよ。そうすると必ず、良く藤本委員が言ってる木をどうするかっていう話に対して、出来るとか出来ないとかそういうのに全部絡んでいきますので、ただ論議がかみ合わない。それはもう具体的な意見になります。ですから現実に理念、全体構想を作るけれども、ある程度実施計画みたいなものを見ながらということで、そこでそういう作業をする。でないと、ものが進まない。今その段階まで来てるような感じ。来てるんですよ。

事務局 え、ちょっとその作業をやるに当たって、必要なデータですよ、え～、どういうふうなもんか、ちょっと言っていただければ。縮尺はこれくらいでこれとこれと重ねあわせてっていうみたいな

佐藤委員 縮尺はまさに改めてまた作る必要はないから、今大きい図面ありますよね、成果品の中に。

事務局 あの、すいません。あの先ほどからやっぱその、去年の調査結果でやって、土壌と植生をやって、土壌の広葉樹植栽適地ということで、検討会の方に一回出していますんで、まあ、これ手元では小さい図面ですけど。ですから、このエリアが植栽出来ますよっていうのは去年結果として出したと思うんですよ。今回現地調査でやったのは結局、天然の下種更新がどのくらいまで出来るのかということで、去年の結果で例えば、ここは植栽適地ですよ、で、実際植栽するにあたっては、苗がどのくらいでどうのこうのっていうのはありますけど、今年の結果で例えば10mまではブナの稚樹が生えてますんで、それじゃ10mピッチでとかやります、っていうのは、そういうことは多分、県営の土壌では可能だと思うし、そういう資料は作って出してると思うんですけども。

佐藤委員 それに社会的な環境。

コンサル 結局は基本的に検討会とかで、私もずっと聞き役で待ってますけども、あの目標っていうか、言葉だけの話ですけど、良くあの自然型環境とかでも良くやるんですけど、目標を鮭の上る川にしましょうとか、そういったバーンとしたやつが依然として決まなくて、で、実際皆さんいろいろ資料を出されてるのはほとんどブナの植栽に関する手法的なこと。皆さんも手法だとか種の確保がどのくらいだとか、ということがあって、実際は、まさに一番最初に決めるのは目標っていうか、ブナの森を再生するとか、バーンと、それが良いか悪いかは別として、バーンと決めて優先順位を我々が付加するという、そういうイメージで私らは調査して来たんですよ。で、去年の結果も要するに植栽適地はここですよ。ここは非常に硬度の高い土壌でちょっと簡単にはいきませんよ、というようなものは抽出して出したつもりなんですけど。あとは結局あの実際今この事業自体が、森にしようというのは一致した意見であって、それがなんか曖昧で、というちょっ

と聞いてればですね、現実的にノロ川の森として、放牧地としてこれから運営するのかしないのか、だとかそういうのがはっきりしてなくて、どこを残してどこを植栽しようとか、そういう話が全く、異様なほど条件が整備されてなくてですね、非常になんかこう、みなさん何を言えば良いのか良くわかってないんじゃないかな。検討会でもこんな感じちょっと私聞いてて、物事を一言で言っちゃえば、クマゲラの森を再生しようということで目標としてドンと入れちゃって、で実際手法としてどうですか。調査結果は、一応このゾーニングしてあるのはこちら辺ですよ。そうすれば優先順位としてどこらへんから行きますかっていう話に、今年あたりなりそうだなと思ってたんですけど、そこまでなかなか話が進まなくて、結局はこのあいだの協議会でも、結局、何て言うのかな、皆さんの意見言ってるの、手法と目標と構想的なものがごっちゃになってですね、そこだけはなんかこう決まってるんだから、クマゲラの森を再生しよう、いう一つの言葉をボンと出して、で調査結果があつて、で課題は結局ノロ川の牧場地帯があつたままが良いのか、っていうか草地自体を本当の再生事業というのは、あそこに木を植えるというのが目標なんですよ。

蒔田委員 木を植える、森を作る、ブナの森を作るっていうのは良いんですけども、多分あの協議会のメンバー大体その方向だっていうのはわかっていると思うんですけども、それをある人は今の牧場全域、その植栽に適否っていう問題じゃなくて、全部森で埋めたい、という人もいる訳ですね。そのあたりのイメージが共有されてない。

佐藤委員 現実的に森吉でこれから今年が70なん頭かの牛を放してましたけど、実際に今放しているよりは、これからどこら辺を使うのかというのを将来言ってみれば、自然とそういう話が根本にきてて、森吉の人達が、いやっ、俺がたどこ使えばいいんだべな、なんて聞かされてるもんですから、私はクマゲラの南側ですか。これはもうすぐ苗が確保出来れば、すぐ植えられるという簡単なイメージなんで、今なんか検討会とかこういうので進まない、進まないっていうのが非常にちょっと不思議です。だからなんかボンと目標をあげて、具体的な手法の方に早めに入って、出来れば役割分担とかそういう議論に行くまで無理矢理とばして、どうやって意識を、皆さん気持ちを一つに出来るかって言えば、やっぱりなんか事務局とか、この委員会とかでボンと出しちゃえば、それで、なんか皆さんこれでどうですか進むような気もするんですけど。

越前谷委員 そこがちょっと非常にね

福森委員 この再生事業の小委員会っていう閉鎖的な場所では。

蒔田委員 やっぱり、あの当然、以前から入っている方と、今年から入った方がいらっしやるんで、そのあたりの摺り合わせっていう問題もあるんでしょうね。

越前谷委員： そのプロセスが再生事業だと思えば。いや、だからこれね、公の事業でやるのであれば、こんな協議会だとかは私とかなんかやらないもん。もうもっと結論が早くて、もうとっくに動いているもんね。だからこれはね、それは昔の公共事業のやり方で、さっき言ったように自分で設計・予算・発注してでかす。これはもうその分早い訳ですよ。決断も早いし。ところがやっぱり、これはあくまでも共生は最初のきっかけを作るんだけど、本体で動いてもらいたいのは地域の人だということがあるんで、これはやっぱり非常に難しいんですよ、本当のこと言っただけ。悩ましいんですよ。だから、やっぱり行政が音頭ある程度とるにしても、やっぱり地元の人がある気になっていただければ、これは成功するんだけど、恐らくそこに関わってるんですよ、これ。で、僕なんか結論から言っちゃえばね、どうせこれね、県の予算、あるいはボランティアでいっぱいやったってね、とてもこの面積を埋め合わせるだけやれないですよ。それだけのエネルギーがないですよ、そもそも。私はそう思ってるんですよ。だからこれは結果的にはほどほどのところに落ち着くんですよ。ただね、ここで大切なのは、結果として森を作ること、これは大変良いことですが、その結果として地域がね、みんなある程度参画して、一つの目的に対して、森を作ったってこのプロセス・事実、これが私再生事業の一番大事な問題だと思ってるんですよ。これが必ず、他のいろんなものにこれが役立っていくんですよ、そういう地域の人自らこうやっていったプロジェクト。そういう社会を作っていきたい、非常にウエイトここにあると思うんですよ。でないと、ほとんど技術論だけで、ほとんど成果だっただけで答え半分以上あるし、半分以上か8割くらいみんな答え持っている訳なんです。苗木は何を使って、いつ植えるとか、どこに植えれば良いかっていうのもわかっている訳なんです。ただ、あの確かにね、今佐藤委員の方で言ったようにね、私も昨日見て、去年の調査結果で全部植栽計画出してる訳ですよ。そんなにね、迷うことはないんですけど、ただ、よく見ればわかるんですけど、本当の植栽適地っていうのはわずかなんですよ、あそこの中で。あとはね、土壌も変えちゃってますから、非常にやっぱり土壌硬度が高いとか問題があって、やっぱりあのままだと、木があまりうまく育たない。だけれどもなんかしら育つだろう、土壌改良もしてやれば、いうところを含めると植栽適地もかなり、ある程度出る。ただやっぱりそれを考えなければいけないので、やっぱりあそこの図面ばかり、本来の植栽適地がどのくらいか面積で見ようと思ったけども探せなかったんですけども。それと土壌改良してもやれば可能性があるところと区分けしたのがあって、それが1/5,000にね、あるいは今度はかなり具体的に、さっき言った島を作るにしてもなんにしても、設計は、設計的な感覚でねかなり、僕は検討出来ると思います。

蒔田委員： 適地の面積って出てましたっけ。

事務局： そのトータルで。個々の島どりになっているやつの、それぞれがいくらっていうのは。

蒔田委員 全体では何 ha でしたっけ。

事務局 え〜っとですね、

コンサル 個々のデータは平面図上には全て面積が出るようにしてあるんで、こまいやつでも大きいやつでも平面図上では出ますよ。

蒔田委員 面積が出るっていうのはどうやって。何か、表か何かで出てるということですか。そうじゃなくて、この面積を測れば良いってことですか。

事務局 ええ。

蒔田委員 測ればそれは出るでしょうね。

コンサル 測ればっていうか、データ上すぐ測れるようなマップMっていう地図データになってるんで、それはすぐ出来ます。

蒔田委員 あの〜、その適地とされたところだけで十分なのか、どうなのかっていう判断はしないといけないと思うんですね。多分、森吉にブナ林を復元するといったときのイメージは、適地はもっと広いような気がするんです。僕、皆さんの持っているイメージは。だから、そのあたりがどうなのかっていうところをちょっと決めていかなければいけないし、例えば、今適地とされたところだけを埋めるとしたら、苗がどれだけあれば良いか、ぐらゐの情報は出して方が良いですね。それはまあ、出せると思いますしね、面積がわかれば。

事務局 多分、そういう議論をすれば最終的にまたこう最後に行き詰まるのが植栽エリアの範囲だと思います。ここは土壤改良だとか、要するに植栽するとかそういう議論になると取りまとめが出来なくなるっていう経験をしていますので、

蒔田委員 例えば、全部掘り返すなんていうのは難しい。

佐藤委員 まあやってやれないっていうことは

蒔田委員 ただ、いろんなところで結構やったりはしてると思うんですけどね。そういうのはちょっと先の話なんですけど。全体としてどれだけ植えないといけないか、っていうことについての基礎的な情報というのは提供する必要があります。

越前谷委員 事業にかけるのは何億ぐらいだっけか。

事務局 え〜と、億まで行ってないんですよ、実は。

越前谷委員 厳しいかもな。考えただけで予算がない。これやるのは結局あれかな、森林組合とかどっかにやらせるのかな。ボランティアっていうのもあれでしょ。

事務局 ある程度イベント的なものは、ボランティアとか、ある程度の小面積とか。実際の面の方は予算付けて、森林組合になるのかはちょっとわかりませんが、委託工事という感じでやらざるを得ない。

蒔田委員 ちょっと、この具体的なことはもう少し後にして、福森委員の方の話を聞いて。

福森委員 全然詰めてなくて、思いつくまま書いてきたんですけども、目標っていうのは今まで出てたとおり、周辺森林と連続した森林っていうことで、ちょっとその画地上っていうか島を作るまではイメージしてなかったんですけど、それに続くところで下種更新が出来ないところを、少しかう植えていったらどうなのかな、ということで思っていました。先ほどエヌエスさんからも喋られましたけど、クマゲラの生息できる森林を作るといような言い方をすれば良いんじゃないかな、っていうのが僕の考えで、クマゲラってどういうところに住むの、っていうことがこの環境学習とかそういうことに繋がっていくんじゃないかな、それを地域住民なり、学校での環境学習とかそういうところで繋げれば、クマゲラ＝豊かな自然、っていうか、そういうのがあるからクマゲラが住めるんだ、ということでフィードバックして繋がっていくような感じの目標で良いんじゃないかな、と思ってそういう感じの書き方をさせていただきました。後、地域住民との繋がりがりってここに書いてありますけれども、ここで一番初めに生まれましたけれども、北秋田市民としてあまり地域のっていうのがありませんので、まあ、みんなが集える場所、秋田県民が集える場所というような考え方で、活動をとおして生まれるようにしたいっていうのを付け加えて、入れたら、目標の中に入れちゃっては良いのかな、ということでここら辺を入れて、目標のどこに入れました。再生とかこの辺の趣旨のことは後でまだ、話されるんじゃないかなと思うんですけど、自然再生の目標とか作業する中で、ほっといても多分、時間がかかれば、ここはそれこそ下種更新で段々島となっていて、牧草地帯が段々狭くなっていくんじゃないかなと思うんですよ。それをいかに早く、ブナ林というか周りの森林と似たような森林に仕上げていくかっていうことで、あの、植えたり、手入れしたりしなきゃいけないんじゃないかなということを考えますんで、その辺、あの、人と人手で、その苗とか刈り払い、人手かかればお金もかかるんですけど、時間まかせばっかりでなく、積極的に人がこう関わっていかないと、いけないっていうか、自然再生っていう、生きてる内に見たいってみんな喋ってましたけど、そういうふうにはならないんじゃないかなっていうことで、この植栽とかちょっと自分なりに考えたことをさらっと書いてみたところです。え、まあ、趣旨とかこの辺は、藤本委員のレポートの中でちょっといろいろと見させてもらったんですけども、中でちょっと疑問っていうか、そうだっけかって思ったのは、レポートっていうか最後の2枚のどこについてたところで、春ないし秋とか、育苗っていうところ

に秋にポットに育てて、さらに2年育てて、播いて4年目の秋にポット苗として移植出来るようになってというような書き方してありますけれども、この秋、なんて開葉前、または葉っぱが落ちてからが良かったんじゃないかなって、ちょっとこの辺が疑問だったことと、後苗木に150 cm、最低70 cmぐらい必要だみたいなことを書いてありましたけれども、根っことか、こう良ければそんなにサイズ、大きさはそんなに気にしなくて良いんじゃないかなっていうことで、藤本委員のこのレポートを見て感じました。その中でその、春先にブナの山取の話も書いてあると思うんですけど、多分、雪消えと同時に開葉すると思うんですよ。で、それを取りに下からいったら、もう多分開葉し終わってるんじゃないかなと思うんで、春先は多分苗木はとれないと思うんですよ、それなので、その、取るのであれば秋、秋山で山取りして畑に、下に持ってきて仮植しておく、とかして苗木を成熟させる、させてから山へ持っていくという作業が必要じゃないかな。ただ山から取ってきて、すぐ植えて、つくかっていうとちょっと疑問じゃないかなっていうことで、その辺はちょっと考えた方が良くないかなっていうレポートだな、と思って読ませてもらいました。後は書いたとおりで、そんなイメージ、皆さん御存知のことばかりだと思うんですけど、そんな感じです。

蒔田委員

はいどうもありがとうございました。えっと、ゾーニングっていう点でその、植栽適地を中心に島状にというイメージとともに周辺の森林との繋がりをどうするかっていうことが、もう一つ大きなポイントですね、今あげていただいたように。どうでしょうか。

佐藤委員

まあ、連続性については前回の協議会の中でも、ほぼ一致した結論のことなんです。連続性ってやっぱり、この500 haの草地と、もう一つは周りの森林、今クマゲラが住んでいる特別保護地区。まあ、私のイメージとしては中は、500 haの部分については一つのものとして見て、それを今度周辺の森林との連続性を考えるっていう、連続性についてはそういうイメージ。今、森吉山麓周辺にブナがいっぱいありますね。そこに500 haの再生しないとイケない部分がある。で、それ、そこの部分を今の周りとは一体化させるっていうことで、そのクマゲラが住む森林と連続させる。なんかこう、なんて言いますか、500 haの島同士の連続性っていうことじゃなくて、500 haが一つの森林になるっていうイメージです。

蒔田委員

トータルそれだけすることによって、周りから飛んでくるスペースが出来る。

佐藤委員

私はそういうイメージで。

福森委員

連続性、2次林となって間に入っているところはもうありますよね、だからそういうのは回廊じゃないけれども、あつては良いのかなと、だからそれも含めて、今とともに肉付けする。今あるのが骨であればそれに肉付けするような形で、再生、少しずつしたら良いのかなというイメージを持ってたんですけど。

越前谷委員　　これ、やっぱりね、先ほどの図面上で検討しなきゃいけないって言ったのは、私はこの実際にそのイメージを書いた連続性の話だったら、そこで止めれるとか、出るとか必ず出てくる可能性ある訳なんです、あその場所は。湿地があって。そうした場合、例えばまあ、ブナ林の大きいやつと結びたい、簡単にいうと直線で結ぶというのはすぐイメージ的には出る訳ですけど、実際には結べない、意外とそういうのが出てくるんじゃないかと思うんです。そこでやっぱり連続性考えるに、相当ね、そういうものの図面で実際にいろいろ検討したものを踏まえながらやっぱりもう一度、戻していかないと、なかなか難しいんじゃないかと。

　　ただまあ、結局はね、まあ天然下種更新の去年の調査でも5m、まあよく言えば10m程度の分布しかない。10mそんなで、大きくなったのが実を付けるまで50年もかかるっていうことですから、天然下種更新の進捗っていうのは、この逆に言えば50分の10ですから、年間に換算すると20cmですから、そこらしかいかないわけですよ。100mってどのぐらいって言うても全然問題ないわけなんですよ。で、恐らくね、かつて、昔、氷河時代から復活して、ブナがどんどん北進したって、その時どういうふうにしてきたかっていうとやっぱりそういう進み方だけでは計算あわないわけですから、当然小動物とか、やっぱり巣を作ったわけですよ、実際は。そう考えないとね、北進した結果と全然あわないんですよ。で、ちょっといろいろ問題はあるんですけども、ですから、やっぱりそういうことで見ていかないと、本当は駄目で、結局はその作った連続性をあとは、その場所、場所で見えていかないと、で、そのところが湿地、非常に水がある、加湿地であればそれはしょうがないから、あるいは非常に良いようなところは樹種もこれはやむを得ないかもしれないけれども、山の結果植えざるを得ないかもしれない、そういう形でまあ連続性をまあとっていくというそういう現実的な話になっちゃうんじゃないかなという気がするんですね。で、そこまでしてやるかどうかはまた別の次元になるんですけどね。

蒔田委員　　そんなに無理してこう島と島を繋いでしまわないといけない、ことはないような気もするんですけど。

越前谷委員　　だからやっぱりね、あの構わないでおくとうなるかっていうこともあるわけなんですよ。これ、非常にポツンポツンしかないけども、例えばキハダがポツンポツン生えてるわけなんですよね。ですから、あんまり良いヤナギではないけれど、ヤナギがポツンポツン生えてますから、それなりにブナではないけれど、他のものは生えてきてるわけですよ。その辺の状況を見極めなければいけないってこと。そういったものがね、ある程度こう少しでも森林化してもらえれば、当面それが使えるかもしれないわけなんですよ。

佐藤委員　　もしかすると人工の島が、島なり、天然の島が自然に広がって、広がって広がって、結果として繋がっていくという可能性も否定できない。

越前谷委員 本来はそれもある。それを考えるとそれがみんな広がって植えられている。それはもう、植生が全部破壊された後、植生が復元していくという話ときわめて同じ話なんだよね。

蒔田委員 えっと、そしたらそのまま、再生イメージっていう点、去年度の調査結果の再生適地はどこなのかっていうのは協議会に出してもらった方が良さそうな気がしますけれども、どうでしょうね。

越前谷委員 やっぱり、誰かに作業をやっぱりちょっとしてもらいたいなあ、誰かに具体的に図面におとしてさ、そこでやっぱり検討してしないとね、なかなか。

蒔田委員 図面っていうのは基本的に出来上がった

越前谷委員 いやいや、要するに島を作るイメージ、島の配置だとかそういうものを考える時にどういうふうにしていくか、やっぱり図面をつめなきゃ。で、やっぱりさ、先ほど言ったように、土壌条件が悪すぎるもんですから、植栽適地としたところであっても、やっぱり普通であればほしい我々が植栽しないとこだもんね。本当に植栽適地っていうのはね、土壌の調査の結果だとそんなにないよね、ないとも言えないけど全体の一部だよ、だからまあ10 ha とかわずかその程度でないのかなあ。

蒔田委員 事務局は何 ha ぐらいで。

越前谷委員 それもわからないところなんです。

事務局 一応ですね、これ事業を進める時に着工段階で予算としては毎年2,000万、5年で1億という流れだったんですけど、ところがそれをたてた段階で、大きく予算、政策予算も削られて、実際問題として2,000万確保出来なくて、各年1,000万というレベルでしか今組めない状態。ですから5年で5,000万というのを一応こちらの腹づもりとしてます。で、あと面積的なものなんですけど、例えば、苗1本いくらとか、例えば耕起するのであれば ha いくらとかやってるんですけども、やるにあたって、例えば1 ha に何本植えるかっていうのは、それは面積っていうのは全然変わってきて、いろいろ資料を読んでも全然、ものによって全てが違ってるもんで、これ、どうしたら良いんだろうなっていうふうなのが、むしろ、例えばやるんであれば ha 当たり何本くらいが適切なんじゃないのとか、むしろ教えていただきたいなというのがありますけど。

佐藤委員 ちょっと難しい話 ha 当たりどのぐらいというのもわからないし、どのぐらい林を成立させたいのかによっても違うでしょうし、まあいろいろ植え方によって ha 当たりの予算も違うし、やっぱりいろんなものを総合して、目的として木材生産

ではないんで、多分そんなに埋め合わせなくても良いと思いますけど。

越前谷委員 私もあんまりあれですよ、haの本数多くする必要ない。

事務局 なんか資料とか見ても、結局なんかその、木材生産みたいな形で書かれて、この事業の参考にならないというか。

越前谷委員 それブナの人工造林っていうのは元々木材生産でやろうかという発想が強くて、要するに環境的に植えていくという発想は元々無かったんですね。それはしょうがないんじゃないかな。だから、はっきり言って広葉樹はスギの人工林の後追いみたいな形で本数を植える必要はない。これは広葉樹一般について言えると思う。だから私はずっと少なくて良いと思う。大体平均したこのぐらいの太さのブナ林で200本から150本しか立ってないじゃないかな。それからまあ言うとな、どのぐらいのリスクトラップに巻き込まれて、そういうリスクをどのぐらい見るかによるけれども、まあ、少なくとも大雑把に言うとな、まあ1,000本もあれば御の字かなと、私なんか思うんですけどね。すれば、4倍くらい用意して。

佐藤委員 2,500~2,600本あれば、なんて言うかね、充分でないですかね。少なくとも5,000以下で。

越前谷委員 そこが大きいな。だけど、普通はあれですよ、そんな本数は必要ないですよ。これで予算もだいぶ違ってくる。

佐藤委員 ちょっと私、去年、この図面重ね合わせるとこの草地面積って意外とそんなにあれですよ、この中で言うんだったら、このブナの50のある場所が特定できれば、その周辺には相当稚樹もありますよね。

蒔田委員 2次林もかなり広いですね。

事務局 現在、非常に量が少ない。

今野課長 ド素人なんで、土壌適地っていうお話ありましたけれども、その越前谷委員のおっしゃる島っていうのは土壌適地の中に作ってるわけですか。適地の中に作ってるっていうわけですか。

越前谷委員 いや、その一応は、前のコンサルの方でやった土壌適地っていうのはかなりまとまった面積あるわけなんですけれども、で、あれが大前提です。それを中心に、ただし、本来の適地っていうのはその中の一部ですから、それはそんなに土壌改良もそんなにいらんと思うんですけど、あとは例えば耕起、耕してやらなきゃいけないとそういうことをしないと植えることは難しいでしょう。

今野課長 　だから、私わからないのはその、島作っていくというのは非常に良く、例としては良くわかるんですけども、結果的にそうやって島を作っていくと、多分、帯になるんですよ。帯になるんじゃないですか、島と島の間が。帯になって、それが面的にずーっと広がっていくということじゃないですか。島を作るっていうのは将来的に、ポツン、ポツン、ポツンと島作ったやつが、このあたりがこう増えてきて、いずれこう繋がっていく。そういうことなんですか。そういうことですねよ。そうすると、その、なんて言うのかな、500 ha 全部をそのブナの森にするっていうことも、最終的な目標としてはおかしくないってことですか。

越前谷委員 　いや、それはそう考えてないです。だからその中で例えば、湿気があまり強すぎるところはね、やっぱりこれ、適地として選んだ中でもですよ、やっぱり微地形によって微妙に違うことですから、それはやっぱりね適地適木で、僕はいくべきだと思うんですよ。メインはブナですけども、やっぱりそのそういうところは別の樹種が良いと思うんですね。で、圧倒的にブナの本数は多いと思うんですけど。

今野課長 　あの、夢を描く、私はいつもお互いに100年後の夢書けばいいべと、50年、100年後の夢を。これ、どういう夢だかって言えばこんもりとした森つぐればいんでねが、と思うんですけど。

越前谷委員 　ただあその森は、恐らく昔ね、伐る前はどうかであったかという、あの湿気のあるところは湿地性の樹種がおがってあった訳ですよ。恐らくサワグルミが入ってあったりして。で、あのちょっとこうその辺より高いところってばね、これはもうブナですよ、圧倒的に。恐らくね、全体からいくと、恐らく9割かそこらはブナ林であったでしょう。

今野課長 　いずれにしても、全部ブナでなくてもいろんな樹種が生えても良いでしょうと。そして、今あるその森林との連続性っていう意味ではね、いずれは繋がるべ、なんですべ。繋がるんですよ。せば、あと手法の問題なんですか。今ある森林からもう一つこう増やしていくのか、島でこうやっていくのか。

越前谷委員 　いずれ繋がるっていうのは時間のね。やっぱりあの一番悪いのところは、この辺が悪いところは、この辺が悪いところあるんですけど、こういうところが本当に放置して森林なるのはやっぱり黙っていると100年とかかかっちゃうんじゃないですか。下手すると。

今野課長 　ただ、最終的な目標としては500 ha 全部を、ブナの樹種があった昔どおりの森に作り上げたっていうの、最終的な目標にするってことは、良いんだっすか。

越前谷委員 　最終的な目標はクマゲラの棲む森でしょう。

今野課長 クマゲラの棲む森を作りたいんだよって、それ言えば良いんでないの。

事務局 ただ、ここでちょっと問題なのは、ここ今500 haの約半分が草地で、そこを丸ごと全部100年でやりますって言ったとなると・・・。

今野課長 それこそ、それは技術的な、科学的な裏付けでねばよ、将来500年経てばあそこ全部森になるかもしれないけれど、100年後は無理だよ、せいぜい25%だよ。それがこれこそ技術的な、科学的な裏付けになるでしょ。そういうのを我々もりたいんでないの。最終的には全部森にしたいって。自然に任せておけば1,000年かかるのかわからない。

佐藤委員 前回の時に20年、50年、100年、200年のなかに、その中にこの問題がちゃんとあれしないと、みんな植えるのかあるいは自然に任せていくのか

蒔田委員 それともう一つ、例えば福森委員のゾーニングのところに眺望点として、植栽を抑制するかという、そういう指摘もありますよね。それで良いと思うんですよ、もともとブナ林だから、全部ブナ林に替えるのが問題なしに良いっていうんじゃないかと、今の状態からこう作業していく中で、これが後どうやって使っていくか、ということも含めてね、やっぱりここは眺望点として残しておこうというのがあっても良いだろうし、草原、草地景観として残したい、っていうのはあって良いと思うんですよ。もちろん実現するというところで、何ha植えられるのかっていう現実的な問題と一緒に、あそこをこれからどう利用するのかっていう点からも出さないといけないですね。

佐藤委員 やはり、あの、今の、なんだあそこの青少年野外センター、あれずっと今あそこから見える向こうの、森林がないが故に向こうの眺望がありますよね。あれ将来全部なくなったらたら何も見えなくなる。あっこ残していく、そこら辺も指示していく。それからあと放牧の問題と。それを潰していくとまた、はっきりしたものが見えてくる

越前谷委員 もともと展望台の周りまで植えるっていう考えは、私は持ったことなかったんですよ。それからあのキャンプ場のあるところだって、植えるつもりはさらさら頭の中じゃないし。

事務局 前回の技術検討小委員会で一応、担当の話というふうなので話したんですけども、野外観察基地のやつを考えると、あそこの前のところ。それからやっぱりあの高台の展望台は、それとキャンプ場ってのは残さざるを得ない。

越前谷委員 施設としてね。施設の目的と反しないって訳にはいかないですよ。

事務局 牧場に関して言えば、前回も言いましたけども、最終的に北側の方に集約したいと思ってるというふうに、北秋田市の担当も言ってる。で、数年後には南で良いんじゃないかっていうふうな形で、あくまでも担当レベルの話でそういう話し合いしてますので、ちょっと今すぐ南側の牧場部分に手は付けられないだろうけど、将来的には何とかなるだろう。ただ北側のところはまだちょっと、おいとかなきゃいけない。

蒔田委員 それはね、そういうことはなんども聞いたんですけど、図面上に蓄積していかないと進まないんですよ。だから、本来まあ協議会との日程の関係もありますけど、本来の進め方だと、この小委員会に次の小委員会の場に一昨年のデータの実績の上に今言われたようなその牧場の部分はどれだけで、明示して、展望プレーズとしてこれだけの場所を確保して、ここはこうする。そういうのを重ね合わせた図面をみんな見ながら、こう、じゃあ、そしてそれぞれの植栽の可能性のあるいくつかのレベルに分けて、面積がいくらで、そのためには苗がどれくらい用意されて、その用意が可能か不可能か、予算的にはどうか、っていうふうに並べたものがないと話がこれ以上進まない。ですから、ちょっと次の協議会にどういうふうに持って行くのかわからないけど、本来だったらそれをまずここで、叩くんでしょね。

越前谷委員 そうそう。それが本来の小委員会ですよ。本当は。

蒔田委員 でも、それはやらないと仕方がないんじゃないですかね。

今野課長 わかりました。

事務局 牧場とか概略の施設とか、ここは残しておきたいというふうなのは簡単なやつは作っておきます。

蒔田委員 そんなに難しい話じゃないけど。

佐藤委員 牧場の問題であって、現時点で、牧場っていうのか放牧地を途中で変えますってなっても良いんですよ。将来状況が変われば。

今野課長 今はこれだけ残すで良いんでね。将来この牧場残る保証、絶対ないですよ。これから農家も少なくなる、人工も少なくなる。そこで牧場が広がるなんて、私ちょっと考えられない。これから先。

蒔田委員 それはもう良いですよ。どうせこの今計画立てても10年20年そのまま変更なしに続くわけじゃないんで。これ何年か経って見直して、変えていかないと仕方ないもんなんです。まあ現状の判断で良いんじゃないでしょうかね。

事務局 牧場部分、今ここでだいたいここあたりで、っていうのは出る。

越前谷委員 ただ、是非5年の実施計画やるあたりは牧場の範囲をはっきりさせないと。

今野課長 ただ、わかってらっすべ。昭和47年頃だったすか、あのあたり山登ってるんです、森吉何回か。北秋田県市山岳会ってあって。そしてね、どこかわからないけども、いずれ登る途中で牛発見されてるんだすな。そして牛のモーっていうあれだとかね。林の中です。

越前谷委員 林間放牧は昔からやっている。だからあそこは一時ヨーロッパのブナ林がね、写真で見るしかないんだけど、それみたいにブナ林の下は自由に歩けるんですよ。

今野課長 そう言うイメージはあるんですよ。だから。

越前谷委員 こんなこと言えばあれだけど、秋田の山ってね、本来自然の非常に高いブナって、まずほとんどないのよ。私歩いた限りは。みんな昔伐ってとかね、林間放牧非常に多いですよ秋田は。上の湿原まで。

蒔田委員 進め方をまず確認して、どうしますかね。それについては、まずそういう図面用意してもらって、もう一度それを見て、議論する、確認するっていう感じになるのかもしれないですね。それで、苗木の本数としては、どうなんでしょう ha 当たり2,000本とかそんなにないですか。

福森委員 スギの人工林で3,000本だからスギよりは少なくて良い。その半分くらいかなっていうイメージは持ってたんですけど。

佐藤委員 予算をはじくためには本数の計算必要でしょうけど、実際に植える場合は縦横決めて植えなくても良いと思いますし。まあ天然の木はあるわけです、当然。ピックアップしていけば良いと思いますんで。

蒔田委員 大まかに苗木はどれだけいるかっていう目処を出す必要はありますよね。まあ、こんな事業なんで、枯れたらまた植えたら良いというぐらいのつもりでやったら良いと思いますよね。どうせ5年に1度は豊作なんで。

越前谷委員 疑問があったら、要するにそのあれだよ、例えば実験やれば良いんじゃないですか。その中で良いのを選んでいけば良い、いうふうに考えた方がこの事業やりやすいと思うんです。基本的にはやっぱり広葉樹は、スギの人工林の後追いしては駄目だということだと思っただすよ。私、前からそうなんですけど、私の意見です。だから、本当はまあ少なくて結構ですよ

事務局 1, 000本といえば、何m間隔。

越前谷委員 実験的にどうしても、あの、用材を取るっていうことになるでしょ、やっぱり経過させて、枝下をあげていかないと、ある程度本数は必要ですよ。だけど、僕らもう時間的にもっとあれでしょ、遙かに大きくて、やっぱりあの普通の用材林のための本数は参考にならない。

佐藤委員 雪も多いんで、やっぱり枝葉払ってって、がしっとした樹型にしないと。なかなか。

越前谷委員 雪の影響どう見るかだね。豪雪郷あたり、まだあるかな。雪も随分、あれなんだよ、各試験場、日本海側の金沢、石川か、あの辺からずっと、いろんな人が散歩して徹底的に調べたでしょう、だから、あれっていうのはあれじゃないですか、要するに、あそこはいつだったか、建物たてるときにあの畜産の小屋に約4mぐらいだったもんね、あの積雪。

佐藤委員 ブナを切る場所で2mぐらいですね。

越前谷委員 だいたい4mぐらい。雪の質が全然違って、まあ、あそこは平らだから、その辺どうするかっていう問題あるもんね。私は良く支柱やるけど、支柱はいらないっていう考えです。ねばどうなってるか知らないけど。

蒔田委員 えっと、そしたらそういうところで、次回の図面において面積出してっていうのをここでもう一度議論するということにはなるとは思いますけど、それで、再生イメージっていう点で、今までの議論以外でなにかありましたら、聞かせていただいたらと思うんですけど。どうでしょう。

佐藤委員 私の基本的なイメージで、やっぱりブナっていうのは豊凶著しいですし、種子散布率が非常に弱いんで、やっぱりそれは人工的に島作ってやって、あとはやっぱり風散布の樹種も確認されてますし、そんなのもやっぱり風がどんどん運んでくれると思いますんで、やっぱり島はブナが、湿地とかは別として、ブナを中心に島を作ってやる、というのが。プラスアルファで天然更新を期待して。

蒔田委員 私の方で一つ、今まで議論出てないんで、提案が。手を加えない実験的なものを残しておくっていうのは、僕は良いんじゃないかな、と思うんですよ。というのは、あの、手を加えてこれだけやれば、こうなってます。そうでないところは、こんなふうに、変化がどういうことかわからないけど。というのを同じような場所で作っておくと、こう何年目に来た人でもそれが見られるというのがあって、変化自体を見ていくという観点を事業の中に入れた方が、結果が100年後じゃないとわからないけど、とにかくその方が良いんじゃないかなという気がし

ますんで、実際にプランニングするとき、ゾーニングするとき、そういう場所も入れてみると、環境教育的な観点っていうのが出てくるんじゃないかな、というふうに思ってます。

事務局 言われたように、ここ、子供たちなり興味持ってる人を連れてきて、こここうやったら、こうなったよっていうのは確かに必要な事業だと思います。それでも、やっぱ植えてない、手をかけていないところはここでね、植えたところはこうでね、っていう見せ方は必要なところだと思ってるんで。

蒔田委員 というぐらいですね。それで、次回の協議会に対してですけども、どういうふうに報告しますかね。この小委員会は今一回、協議会終わった後にもう一回っていうことになるんですね。そうすると次回協議会にはまだ図面は出さずに、例えば去年の報告で適地面積はどれぐらいで、例えば、植栽本数は何が何本で、っていうふうな話をするという程度になるんですかね。それで。

越前谷委員 やっぱりね、今度の協議会はやっぱり、かなりその、かなり全体のスケジュールがかなり核心に触れた話をする場にしないとね、後大体5回目の最後の協議会になんていうのは、大体まあ通常であれば大体OKと、いう場なんですよ。ですから、こんなこと言うとなんだけど、小委員会の役割っていうのは、次の協議会に非常に大きいです、実は。ただやっぱり、今、蒔田委員が言ったようなものはね、次の協議会出せるように。やっぱり必要であればね、もう一回この委員会開いても良いと思うんですよ。そういうデータが全部整備されて。そういうものをね、協議会へかけないとね、協議会へ集まって来た人がまた同じような議論をやっちゃう。ここなんかデータを出してやらないとね、絶対協議会うまくいかないです。

佐藤委員 それからあれですよ、前回藤本委員が事務局の方へ相当強いことを言って、今回その話を皆さんで協議して、この次、またそのままでいくと、また同じ議論をするんで、その提案したものをどういうふうにある程度答えていくか、まず特に苗木の問題に結論を出さないと絶対間に合わない。そこのところはやっぱり考えておかないと、苗木の手当をどうするか、ここは当然詰めておかないと、

越前谷委員 それもまたさっき言った非常にもどかしい。だからやっぱりね、今の全体のイメージの話から一連のね、植栽のどういうところを狙っていくかさ、苗木のどうなのか、どういう植え方していくのか、一応ね、こういう方向で今検討してるみたいな話を出さないと協議会成り立たないのよ。そもそもは。

佐藤委員 だから、こういう話をされたときに、答えるようなことをまた別途論議しておかないと、いけないのかな、ということでしたけど。

蒔田委員 　　ちょっと質問なんですけど、藤本委員の出されたのに対して、どういう対応をされてるんですか。これまで。

事務局 　　えーと、今は言われたのは確か、佐藤部長が苗の話してくれて、

蒔田委員 　　じゃなくて、10月でしたっけ、11月だったっけ、委員から自然保護課に出されたのは、その後の対応、梨のつぶてなんですか。そういう対応の問題じゃないかと僕は思うんですよね。今回配ってもらったのも、僕はたまたまこの前隣に座ってたんで、こんなん作って、自然保護課に出したんだけど、って見せられたんで、それでどんなもんなんですか、見せてくださいって初めて僕も知ったんです。会長も知らなかったし、それがまずいんかな。

越前谷委員 　　私もインターネットで初めて知ったからって

事務局 　　これも私もらってどうしたら良いのかなって、取り扱いに困ったんです。

佐藤委員 　　困る必要はない。これ全部オープンにすれば良いんです。全く困る必要はない。私もそういうニュアンスでなくて、去年エヌエスさんが調べたデータと藤本委員がいう事の整合性を全部チェックした。それはまず、合致してますんで、それでいづれ、この報告書は中身をオープンにする形ですよ。いわゆる調査データに基づいた。その時にもし、そこにも出てないことが急に指摘される。なんかその辺なかなか固まっていけないから。

今野課長 　　そうすれば、この前回の議事録と一緒に、前回のお話のあった藤本委員からの資料を一緒にお送りしますだからって言って、協議会に送ったと。

佐藤委員 　　それを基にですね、小委員会で協議しないと。

越前谷委員 　　それはやっぱりさ、一応技術的な話ならば小委員会、小委員会に藤本委員の資料を出して、それぞれがいろんな意見で検討して、今、大体こういう方向だろうというような話をしないと。やっぱりいきなり藤本委員は協議会じゃない。技術的な話であって、前回のビジョンみたいな話なんか、これはもう協議会なんです。そこは、やっぱり整理していかないと。

　　まあ、私の気持ちとしてはやっぱり、もうちょっと詰めたものをさ、協議会に是非あげていただきたいな。でないと協議会も本人ももたないよ。

蒔田委員 　　事務局にあれですか、苗木の話なんですけども。実はあの、昨年エヌエスさんが採集したブナの実をどうするっていう話ですけど、10 kg。それから現地にも播種していて、その苗を有効活用として、今は植えっぱなしで、管理をどういうふうにしていくかっていうことをきちっと来年の話として考えていかないと、5

年に1回のせっかくブナの実も無駄になってしまう。それ必要な部分じゃないかと思ってます。試算すると、一般的な確率ではセンターで38,000本くらい、うまくいまして、そんなに出ないかもしれないけども、それをなげるわけじゃなくて管理していかないと。

越前谷委員 かなり、それだけの本数だと大変だぞ。

蒔田委員 そういうのは来年の事業で何十万ほど苗作る予算とか、そういうことしないと全部枯れてしまうでしょ。

事務局 とにかく貴重な苗木なんで。

越前谷委員 あの変なこと言って申し訳ないけども、佐藤さんちょっと助けてやってくれなかな。これね無理だわ。正直言ってかなり全部やってって言ったって。段取りもまず基本的にここ変わってないもの話してみれば。

蒔田委員 やっぱりその事業的に、量的にこなす部分と、やっぱりいろんな人に実際に動いてもらう部分と作らないといけないですね。種集めなんて、もっとイベント的になんかやるのは、すごいいいチャンスだったと思うんだけど、結局それも出来なかったですからね。

事務局 あの、こっちが追いついていかなかったということ。

越前谷委員 だからやっぱり、あなたの役割はさ、行政が発案して地元の阿仁の人が、森吉阿仁のね、やっぱりあの人だと歩調くんで、仲良くやることって言えば。これがね、やっぱりあなた方がやらなきゃいけない。やっぱり非常に大きな点だもんね。是非そっちの方にもたっぷり時間かけてもらいたいなあ。この専門的ないろんなまとめのある程度は背負ってもらうしかないんですよ、これある程度は。残念だけど、皆あんたがやりたいっていても無理だから。予想しないとね、そうしていかないとね、次の協議会がね、全体が実りのない協議会になって終わっちゃう。

今野課長 それでなんですけども、今回は、今度協議会と最初申しましたけど、またこの委員会をですね、協議会の前にもう一回持たせていただくこと出来るでしょうか。

越前谷委員 やった方が良いんじゃないかと思いますよ。

今野課長 もし出来れば、さっき先生からお話のあった図面だとかですね、そういうものも、まず、頑張ってみますので。それとあの叩き台のまず、作文、書くぶん書いてみますので、もう一度お集まりいただけないでしょうか。

蒔田委員 よろしいでしょうか。いろいろお忙しい時期だと。

越前谷委員 会議も2時間が限界だもんね。

今野課長 あの、よろしいですか。もしよろしければまた御都合をお伺いすると。

越前谷委員 全くもう先生の都合だもんね。

佐藤委員 委員長に一任します。

蒔田委員 はい、結構です。じゃあ、そういうふうなことで、よろしく願いいたします。
あの今日はもうちょっと時間も長くなりましたんで、いろいろ資料持ってきていただいたんですけど、それも併せて次回ということでもよろしいでしょうか。協議会へ出す方、この越前谷さんの書いていただいた方の、下の方のイメージは良いんですけど、上の方のイメージをどうするかっていうのはまだ議論詰まってないんで、成長、何年後にどうなっていくか。これをどういうふうに示すのかっていうのはちょっと宿題にして、残したいと思いますんで、なんか良い案がありましたらまた、お寄せいただければと思います。ただ、具体的な苗の手当についても、今日あの配っていただいた資料を持ってきていただいて、その上で、どういう形でまとめていくかを次回相談させていただければ、というふうに思っております。いうふうなところで今日はちょっと断片的な、喋っていただきましたけれども、それなりに有益やったのかな、というへんで、また、この続きは次回ということで、申し訳ありませんで、というふうなことで今日は一応。

今野課長 どうもありがとうございました。

開 会 午後3時20分